KAIRIN UNESCO ASSOCIATION 開倫ユネスコ協会

開倫ユネスコ協会
NewsLetter

第７５号
足利市堀込町145 Tel 0284-72-5915
発行者　林　明夫　2012年12月25日

United Nations Educational、Scientific and Cultural Organization (UNESCO)

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では、地震直後の大津波が街を呑み込み、大勢の人々が亡くなりました。福島の原発問題も起こり、日本は未曾有の災害に見舞われ、「地震列島日本」をまざまざと見せつけられる出来事でした。

開倫ユネスコ協会も、岩手県ユネスコ連絡協議会、大船渡ユネスコ協会、釜石ユネスコ協会、また、宮城県仙台市の病院、福島県郡山市の有朋高等学院へ励ましのメッセージボードや義援金をお渡ししました。

今回は、自ら被災地へ赴いた開倫ユネスコ協会　中谷克信副会長より、ボランティアの様子、感じたことを話していただきました。

「東日本大震災ボランティア活動に参加して」

開倫ユネスコ協会副会長　中谷克信

Q．なぜ、震災ボランティアをやろうと思ったのですか？

A．あとで後悔すると思ったからです。

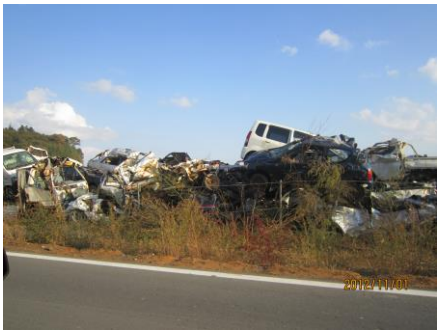
Q．なぜ、後悔すると思ったのですか？

A．報道で被災地の様子が伝えられ、見て見ぬふりをすることができませんでした。もちろん支援の形はいろいろあります。たとえば義援金を送ったり。でも、私は自分の体を使ってがれきを片付けたり、被災者の復興を手伝ったりしたかったのです。

Q．何回くらい行きましたか？

A．５回ほど行きました。もっと行きたいのですが、３日ほど会社の休みが連続しないと行けません。私ももういい年齢ですからね。ボランティアの作業も思いのほか体にこたえます。
最後の１日はクールダウンにとっておかないと次の日筋肉痛で仕事にならないんです。それにマイカーで行くのですが、距離で４５０キロ、休憩込みで片道７時間かかってしまいます。

中谷副会長
農業支援の
ビニールハウス移転



津波で廃車となった車が積まれている

Q．初めての震災ボランティアはどうでしたか？

A．初めて出かけたときは、震災から間もない頃で、何か手伝えないかと思い、全く調べず地図と家にあった線香をありったけ持って出かけました。雨の降る日でした。石巻市立大川小学校で線香を手向け、冥福を祈りたかったのです。しかし、自分の考えの甘さに、結局線香の１本も手向けることができませんでした。他県ナンバーの車が被災者と復興車両のじゃまをしているように感じられて、恥ずかしさで車から一歩も出ることが出来なかったのです。いたるところで自衛隊の方々が泥だらけでカッパを着て活動していました。道にあったがれきはすでに道の脇に片付けられ、かろうじて車が通り抜けることができました。でも、いたるところで道路は陥没して、道の両脇にはぺしゃんこになった車、倒れた松の木、船、たたみ、家の柱、日用品、ありとあらゆる物が散乱していました。亘理町から石巻市に入ると、道の脇に小高く積まれた土の山のような物がいくつもいくつもありました。その一番上には花が手向けられていました。その数に驚くのと同時に、亡くなられた方々に土がかぶされているのだと気づきました。

Q．大川小学校はどうでしたか？

A．北上川の土手沿いを海に向かって進みました。北上川は川幅が広くとうとうと水が流れる海のような川でした。道には大きな水たまりがあり、車で進むのが怖いくらいでした。
川のかなり上流まで大きな船がたくさん流れついていました。道は途中から工事関係車両以外通行止めで、行き止まりに自衛隊の人が立っていました。
１０キロ戻って川の反対側の土手から目指しましたが、やはり途中で通行止めでした。
今年の１１月にボランティアに出かけたとき分かったことですが、行き止まりのすぐ目と鼻の先が大川小学校だったのです。おそらく小学校ががれきに覆われて、それと気づかなかったのでしょう。ここでも結局何もできませんでした。

大川小学校校門前と
校舎に残る津波の爪痕

Q．では震災ボランティアはどこでやったのですか？

A．南三陸町（宮城県）です。防災庁舎で知られていると思います。昔、南三陸町の海辺の民宿に宿泊したことがあったので決めました。それに現在、個人のボランティアを

受け付けているのが南三陸町ともう一カ所くらいしかありません。
その他は全て団体での受付となっています。

Q．どんな作業をするのですか？

A．いろいろあります。まず最も多いのが、がれき撤去です。ビルの４階の高さに匹敵する津波で、海沿いの家は跡形もなく無くなっています。ただ、コンクリートの基礎の部分が残されているだけです。でも現在は以前よりずいぶん大きながれきは無くなってきました。前回の１１月は土の中に埋まっているガラス、衣服、茶碗、アルミサッシ、タイル、材木、瓦の破片などを掘り起こしました。

南三陸町防災対策庁舎

A．ほかにはどんな作業がありますか？

Q．最近多くなっているのが漁業支援や農業支援です。漁業支援ではわかめのめかぶ採りと、わかめの箱詰めを手伝いました。いままでで一番楽しかった作業です。港で漁師の皆さん、そのご家族のみなさんと作業をします。おじいさんの昔のお手柄話が最高でした。ハワイの近くまではえ縄漁に出かけてマグロをたくさん釣った話は今でもよく覚えています。また、採れたてのめかぶを熱湯に通して食べさせていただいたときのおいしさに感激しました。わかめのお土産もいただきました。このように、最近になって地元の人と話をすることができるようになってきましたが、以前はどなたも身近な人を亡くしているからという理由で、地元の人と会話することは禁じられていました。一方、最も辛かったのが砂利の袋詰めです。沖合いの養殖施設を復活させるために重しとして海に沈めるのだそうです。一袋詰めると大人３人でやっと持ち上がるくらいの重さです。スコップで袋に砂利を一日中詰める作業で私の腕と腰はガタガタになりました。それでも夢中になってしまう私は、いや私のチーム１０名は、１日で１５０袋を詰めて新記録を作り出したのです。

中谷副会長
漁業支援のめかぶ採り

Q．農業支援って何ですか？

A．ビニールハウスが津波で流されたため、山の中腹にビニールハウスを移転させる作業です。ビニールハウスはすでに完成していて、その中の土をスコップで選別、石を取り除く作業です。でも、ビニールハウスの中の作業なので温度が異常に高いわけです。水分補給をしながら汗びっしょりの作業でした。

Q．ボランティアに参加する人数はどれくらいですか？

A．南三陸ボランティアセンターの場合、平日は７０名から１００名くらいが参加するようです。休日や連休ともなるとその何倍もの方々が参加するようです。バスで来る団体が加わると参加者数はぐっと増加します。会社ぐるみで参加する方々はバスの利用が多いようです。以前、長崎からバスで来た方々と作業をしたことがあります。雲仙普賢岳の火砕流を覚えていますか？その時に南三陸の方々に支援してもらったそうなのです。そのお返しにとバス１台、運転手２名で夜通し走ってきたそうです。火砕流の話はずいぶん昔のことなのに、受けた恩の重みは永遠に残っているものなのですね。

Q．他にどの地域から参加する方がいらっしゃいますか？

A．私は栃木県からの参加ですが、私の知る限り、仙台から団体で参加した方々を除き、栃木県より遠方から参加している方ばかりです。苫小牧からは４輪駆動の軽自動車で来た５０歳代の女性の方、多治見市からはプリウスに乗ってきた６７歳の図書館館長さん、大阪からは新幹線で来た母娘の二人連れ、福井市からは車にガソリンの携行缶をたくさん積んだ６０歳代の男性、徳島からは水産大学の女子学生、外車に乗っていた浜松の自動車教習所の教官、大阪大学の２回生、東京昭島市のカメラマンなどなど、日本がとても狭く感じられますね。一度来ると３日～７日連続で作業をする方が多く、ホテルに宿泊すると宿泊代が高額になりますので、車の中に寝袋で泊まり込む方が多いようです。

途切れたままの南三陸鉄道の鉄橋

Q．復興は進んでいますか？

A．自衛隊の方々がいたころと比べて復興は全く進んでいません。仮設の商店が増えたこと、スクラップの車置き場が郊外に移転したこと、ホタテや牡蠣の養殖施設ができたことなどは目で確認できます。でも、被災者の住む仮設住宅、寸断されたままの南三陸鉄道、７０センチ下がって満潮ともなると道路まで海水が押し寄せる土地、がれきの山、破壊されたビルなど、いつ行っても同じ状況です。

Q．復興が速く進むといいですね。

A．その通りです。ボランティア活動には数名のリーダーさんがいて作業の指導をしてくれます。その方々もまたボランティアなのだそうです。リーダーさんはよく言います。「ボランティアの皆さんの作業の様子は地元の被災者を勇気づけている」と。しかし、その効果がごくごくわずかであることはだれでも分かります。でも、日本中から多くのボランティア達が集まってくるのです。がれきの山が早く無くなってほしいですね。コンクリートだけ残った家の基礎がブルドーザーで平らになる日が早くきてほしいです。

駅舎と線路の無い志津川駅